

論文

## 現代中国に見られる先秦儒学の影響

侯 雨萌<sup>1</sup>

### Observations of the Influence of Pre-Qin Confucianism on Modern China

Yumeng HOU<sup>1</sup>

#### ABSTRACT

This study analyzes the influence of the Pre-Qin Confucianism system of philosophical and ethical-sociopolitical teachings on modern Chinese philosophy. The influence of Pre-Qin Confucianism that can be observed in daily life, educational activities, economic activities and political activities are documented. The current shape of the Confucianism that is allowed in modern China is also studied.

As a result of this study, the following conclusions are suggested: Although Confucianism was criticized during the Cultural Revolution it was reconsidered, and is currently accepted as a kind of moral thought or ethical thought in various situations in modern China. Pre-Qin Confucianism and its social impact on modern China can be clearly observed in these four situations: daily life, educational activities, economic activities and political activities.

The acceptance of Pre-Qin Confucianism on Chinese morality can be validated as having the potential to solving the various social problems in modern Chinese society. If we add some new considerations to Pre-Qin Confucianism and apply it in a renewed shape, it is suggested that Confucianism spirit will be restored in the Chinese mind and people may behave themselves in an honest manner.

キーワード 先秦儒学 現代中国道徳 徳治主義 法治主義

Keywords: Pre-Qin Confucianism, morality in Modern China, the rule of virtue, the rule of law

#### 1. はじめに

20世紀末の中国では、特に文化大革命の時期において、儒学は専制的な封建思想を代表するものとして嫌われていた。21世紀に入ると、儒学を見直す風潮があり、2013年の11月に国家主席の習近平が「孔子と儒学思想を研究するには唯物史観の立場を堅持し、昔のものを現在に役立たせ、粕を除いて精髓を取り出し、偽物を取り去って本物を残し、その勢いに応じて有利に導き、より深い段階に向かって研究し、儒学を新たな時代条件の下で積極的な作用を発揮させるべき<sup>1)</sup>」という発言をした。

儒学思想を大きく分類すると、儒学の始祖とされた孔子、孔子の思想を継承してさらに発展させた孟子、同じく孔子の思想を継承したが、孟子と違う立場から独自の思想を展開し、孟子への批判の態度を示した荀子の三人

を代表とする「先秦儒学」と、漢の董仲舒を代表とする「漢代儒学」、そして宋の朱熹と明の王陽明を代表とする「宋明理学」の三つに分けることができる。先秦儒学は道徳思想や倫理思想、政治思想を主に説き、神などの超自然的な存在についてはほとんど説かなかった。しかし、董仲舒は儒学と陰陽説を融合させ、災異説を提唱し、儒学を迷信的な思想へと展開させた。そして朱熹の儒学(朱子学)は、儒学の倫理的・道徳的な面を発展させると同時に、「理」と「気」の概念を説き、極めて形而上学的な儒学とした<sup>2)</sup>。

1973年8月から1976年まで続いた「批林批孔運動」では、孔子や孟子、朱熹、及び儒学思想そのものが厳しい批判を受け、儒学思想に関する多くの書籍や文物が破壊され、それを保有した人たちはまたは儒学の研究者たちが

<sup>1</sup> 891-0197 鹿児島市坂之上8-34-1 鹿児島国際大学大学院国際文化研究科博士後期課程

Doctor course of Intercultural Studies, The International University of Kagoshima, 8-34-1 Sakanoue, Kagoshima 891-0197, Japan  
2016年5月24日受付、2016年9月9日採録

過酷な迫害を被った。したがって、現代中国<sup>3)</sup>においては、道徳思想や倫理思想として残されてきた儒学思想は見られるが、封建的な部分、または形而上学的な部分はほとんど受け継がれていない。そのために最も古い先秦儒学が道徳思想の形で現代中国に生きている。そして近年では、これまで提唱されてきた唯物論には人間の生き方としての道徳に関する教えが不足しているということが認識され、それを補足するために中国の誇るべき伝統思想である儒学から道徳に関する教えを取り出そうという動きが見られる。儒学思想の再認識、再整理は、高度成長中の現代中国にとって極めて重要だということが認められている。

本論文では、儒学の中から先秦儒学の部分を取り出し、日常生活、教育活動、経済活動、政治活動の四つの領域に限定し、これらの領域に見られる先秦儒学の影響を分析し、現代中国と先秦儒学との関係について考察し、現代中国に求められる儒学の形とは何かについて考える。

## 2. 先秦儒学とは何か

「先秦儒学」という言葉は、日本ではまだあまり使われていないが、中国においてはよく使われている。

先秦とは、紀元前221年の秦による統一国家成立以前の時期のことであり、先秦儒学とは、先秦時代の、初期の儒学思想のことである。すなわち孔子から始まり、孔子の政治倫理思想を継承して発展させた顔淵、曾参、子思、孟子、荀子などを含める多くの先秦儒学者が提唱した思想を基本とする学問のことである。その中では、孔子、孟子、荀子の三人の思想が最も知られており、多くの場合、「先秦儒学」という言葉は特に孔子、孟子、荀子三人の思想を指している。以下では、三人それぞれの活動時期や、それぞれの思想の中心部分について簡単に紹介する。

孔子が世に出たのは春秋末期であり、当時は、周は天下を統治する力を失い、諸侯は戦い始め、すでに戦国乱世の様相が見えるようになっていた。その混乱の時代に孔子が提唱したのは、「仁と礼に基づく理想社会の実現」である。

孔子は、当時の社会に多くの問題が生じるのは、当代の人々に諸徳が具わっていないからだと考え、それらの問題を解決するには、一人ひとりの人間が自ら勉学し、諸徳を身につけ、自己の欠陥を補足しなければならないと主張した。この「自ら個々の美徳を総合し、自己の不

足を補い、円満な全徳を身につけて保持し、他人の前において高德の士として振る舞う」という思想が、孔子の説いた仁の内容である。

礼とは社会の秩序を保つための生活規範の総称であり、礼こそが仁者の行動基準であり、礼に従って行動することが社会秩序を保つ有効な方法である、と孔子は説いた。

人々が美徳を身につけて保持する仁者になり、礼に従って行動すれば、社会秩序は保たれ、数々の社会問題は生じなくなる。孔子は生涯にわたって仁と礼とを説き、理想社会の実現を求めていった。

孔子の政治思想の最も大きな特徴は「徳治主義」である。為政者が徳を身につけ、それを以て政をすれば、民はその徳を慕い、それを模範にして導かれるというのである。また、徳治主義を歩む為政者に求められることについて、孔子は、身の正しさ、政への勤勉さ、または徳と礼の精神への関心などを挙げている。さらに、国を治めるために必要なものとして、孔子は民の為政者への信頼を最上位に位置づけ、それに次いで民生の安定を挙げ、その後に軍事力と民への教育を挙げた。

孟子が活躍したのは、戦国時代の最中であった。諸大国は乱世において優位に立つため、それぞれ有用の人材を求めていた。その結果として、多くの学者とそれぞれが代表する学派が現れ、多彩な学説が説かれ、思想界はめざましい発展を遂げた。この思想発展の黄金時期は、後世に「諸子百家時代」または「百家争鳴時期」と呼ばれ、中国文化の発展の基盤を定めた。その時代に孟子は、孔子の説に自分の見解を加え、孔子の思想をさらに発展させた。

孟子は、孔子が説いた仁と礼をより分かりやすく解説し、それに義と智を加え、仁義礼智の四徳を君子の備えるべき徳とした。その上に孟子は、仁義礼智が、外から与えられたものではなく、人間に内在するものだと考え、その四徳の萌芽となるのは「惻隠の心、羞惡の心、辞讓の心、是非の心」の「四端」であると主張した。孟子は、すべての人間に四端が生まれながらに具わっていると説き、「人間の性は生まれながらにして善である」と主張した。

さらに孟子は、「五倫」という「父子、君臣、夫婦、長幼、朋友の間に守られるべき相互の義務」を規定し、それが社会道徳の根本を為すものだと主張した。四徳と五倫の説は、後世の儒家に高く評価され、中国人の思想に大きな影響を与えた。

孟子は孔子の政治思想を受け継ぎ、それをさらに展開させ、孟子的特色のある政治思想へと発展させた。その特色とは、いわゆる「王道論」の提唱である。為政者が徳を身につけて実行し、仁政を民に施し、民生の安定を保障した上に、民に孝悌忠信などの徳を教えれば、天下は心服してその為政者のもとに統一されると孟子は主張した。これを王道というのである。

荀子が世に出たのは、孟子から数十年後のころであり、当時、秦の勢力が増大し、秦は他の諸国を併呑することに専心した。諸子百家が活躍できる場が少なくなり、諸学派はより健全な学説を立てようとしていた。荀子は、孔子の思想を継承しながら、当時の諸学派の学説を吸収し、その中から独自の、より現実的な見解を展開していった。

荀子は孟子の性善論を批判し、「人間の本性は生まれながらにして悪である」と主張した。人間には生まれつき利益を望む欲望があり、その欲望のままにしておくと、必ず奪い合いの結果が生じて、礼の文飾条理が乱され、ついには乱世に終わると荀子は考えた。平和な秩序ある社会生活を維持するために、礼の形で道德規範を定め、人間の欲望に節度を持たせる必要があると、荀子は主張した。ただ荀子は、性善論を主張した孟子と違い、礼を人間に内在するものとすることができず、それを外から与えられる道德規範のもととした。

荀子は礼の重要性を強調すると同時に、仁と義をも重んじている。荀子によれば、仁とは愛であり、仁者は人を愛する。義とは理であり、義者は理に従う。礼とは節度であり、人間の欲望に節度を持たせ、人間の生活と感情に規範をもたせると荀子は主張した。

荀子の政治思想には、孔子や孟子が提唱した政治思想から受け継がれたと考えられる部分がある。君主たる者は仁心を持つべきであり、為政するには礼を用いなければならないという主張、民の心情を養うには民を富まさなければならず、民の性質を治めるには民に教育を施さなければならずという主張、また、徳と義による統一への提唱などが、孔子や孟子の政治思想に似ており、孔子や孟子から受け継がれたと考えられる。

他方、荀子の政治思想には、従来の儒学者の政治思想と異なる独自の見解が見られる。まず荀子は、孔子や孟子と異なって、法律の重要性を強調した。孔子や孟子が法律による統制を批判したのに対し、荀子は法律を道德と同等の位置に置き、国家にとっての法律の重要性を説いた。この法律重視の思想は後世に儒家の主流思想とし

て推奨されるには至らなかったが、法家思想へ大きな影響を与えた。また、孟子が王道を提唱し、霸道を厳しく攻撃したのに対し、荀子は、霸道を王道に次ぐ位置に置き、その正当性と価値を認めた。

以上に紹介したように、三人の思想にはそれぞれ対立するところがあるが、大部分は共通している。また、三人の教えはいずれも純粋な倫理・政治思想であり、形而上学的な部分に触れることはほとんどなかった。彼らの儒学は最も根本的な儒学であり、道德に関する多方面の教えは中国人の思考方式、行動様式に大きな影響を与えてきた。

本論文では「先秦儒学」という言葉を孔子、孟子、荀子三人の思想に限定することにする。

### 3. 先行研究

現代中国と儒学思想との関係や、現代中国における儒学思想の価値について、近年では、沈曉敏(2005)の研究や、陳寒鳴と劉偉の共同研究(2013)などが見られる。

沈曉敏は、現代中国において、拝金主義と極端な個人主義が広がり、利を見て義を忘れ、公を利用して私欲を肥やすなどの深刻な社会問題が起こる主な要因として、市場経済に応じた法的制度が完備していないことをあげた。そのほかにも、沈曉敏は、中国人が以前から「公德」より「私徳」を重視することや、「公共意識」や「公民意識」や「公民文化」が未成熟なこと、また、等級秩序や宗法血縁関係の維持をめざす儒学の倫理が公平・正義・自由・権利を追求する「法治精神」を妨げていることをあげた。しかし、筆者は沈曉敏のこれらの主張には賛同しない。

まず、現代中国は法治主義の国家でありながら、市場経済に応じた法的制度が完備していないことは確かであり、それが原因となり、さまざまな社会問題を起こしていることも間違いないが、これは決して深刻な社会問題が起こる主な要因とは言えない。最も重要な原因は他にあると筆者は考える。

また、「私徳と公德」は梁啓超(1902)が初めて提出した概念であり、沈曉敏は、梁啓超が私徳を「個人の場合、誰でも自己の身を善く保つ」と解釈し、公德を「群れをなす場合、誰でも他人に仲良し」と解釈していると理解し、中国人が以前から公德より私徳を重視すると主張している。しかし、私徳と公德の意味について、梁啓超は私徳を「人々が個人の道德修養のみに専念する」と解釈し、公德を「人々がその団体を利する」と解釈して

おり<sup>4)</sup>、沈暁敏の理解と梁啓超の解釈を並べてみると、両者の間に大きな違いがあることがわかる。沈暁敏は梁啓超の主張を十分に理解していないのであり、したがって、中国人が以前から公德より私徳を重視するという主張は成り立たない。

さらにまた、梁啓超は道徳を私徳と公德に分けたが、この分け方そのものが正しいかどうかということについて、なお疑う余地がある。団体に利することは、ほかの諸徳と同じく、個人の道徳修養に属するものであると考えられるからである。修養を積み、自分の不足を補い、徳のある人間として踏むべき道を理解し、それからそれることなく、他人の前において「高德の士」として振舞い続けることができれば、はじめてその人が徳を身につけたと言える。団体に利しないことをするのは、個人の道徳修養が足りないことの一つの外的な表現にすぎないと筆者は考える。

さらに、沈暁敏は、等級秩序や宗法血縁関係の維持をめざす儒学の倫理が公平・正義・自由・権利を追求する「法治精神」を妨げていると主張したが、この主張にもまた賛同しにくい。「批林批孔運動」を経た現代中国には、道徳思想や倫理思想として残されてきた儒学思想は見られるが、階級闘争の名目で徹底的に弾圧されたため、階級制度や宗法制度への提唱は現代中国においてほとんど見られない。封建的な側面が極めて薄くなってきた儒学には、もはや法治精神を妨げることができない。したがって、現代中国において、等級秩序や宗法血縁関係の維持をめざす儒学の倫理が公平・正義・自由・権利を追求する「法治精神」を妨げているという言い方は間違っていると言える。

以上をまとめると、現代中国におけるさまざまな社会問題が起こる原因についての沈暁敏の論述には、間違っているところがあり、また、不十分なところもある。現代中国におけるさまざまな社会問題が起こる原因を正しく理解していなければ、それらの社会問題を解決することはできない。本論文の4.1では、現代中国におけるさまざまな社会問題が起こる原因について、筆者の見解を詳しく述べることにする。

陳寒鳴と劉偉の共著(2013)は、儒学を従来、士大夫によってもっぱら学ぶべきとされていた思想から、一般の人民もまた広く学び、実践すべき思想へと仕上げるためには、二つの転換をしなければならない、と主張している。一つは立場の転換であり、士大夫階級のための思想から一般の人民のための思想へと転換しなければなら

ない。もう一つは礼楽精神の転換であり、二千年前に定められた礼楽の内容を現代中国に活かすために、階級制度の規範から公共生活の規則へと新しく生まれ変わらせなければならない。

儒学を現代中国で活かすのであれば、そのままの形ではなく、儒学思想を整理し直し、思索を加え、現代中国社会に適する新しい形にして活かさなければならないのは確かであるが、陳寒鳴と劉偉が挙げるこの二つの転換以外にも、再認識、再整理しなければならないところが多くある。

例えば、各時代の儒学思想は、それぞれの特徴を持っており、また、同じ時代の儒学者たちであっても、各自の思想の間には、それぞれ対立するところが多く存在する。儒学を一つの思想として現代中国で教えるのであれば、それぞれの思想のそれぞれ対立するところに思索を加えなければならない。唯物史観<sup>5)</sup>の立場で、対立する各思想を比べて見直し、現代中国において提唱すべき思想を見極めることが重要である。

また、礼楽精神のみではなく、儒学の諸徳に関する多くの教えの中には、他にもそのままの形で現代中国に提唱することのできない教えが存在する。現代中国において儒学に積極的な作用を発揮させるために、儒学思想の何が精髓であり、どこが残滓であるかということを究明しなければならない。現代中国において役に立つ教えを抽出して活かし、不適切な教えを解釈し直し、役に立たない教えを取り去る。このように古い儒学思想を新しく生まれ変わらせることは、現代中国にとって極めて重要なことである。

以上にあげたことについて、陳寒鳴と劉偉の論述は不十分であると言っても過言ではない。本論文の第5章では、現代中国に求められる儒学の形についての、筆者の見解を述べる。

以下では、先行研究を踏まえ、現代中国に見られる先秦儒学の影響を考察し、現代中国に求められる儒学の形について考えてみる。

#### 4. 現代中国に見られる先秦儒学の影響

現代中国には、儒学精神を見失っているように見える多くの人がおり、その結果として、現代中国社会では、様々な社会問題が起きている。それらの社会問題を解決するために、現代中国人の心の中に儒学精神を取り戻さなければならない。そのため、中国政府や多くの社会団体、さらに多くの個人が、いろいろな努力をしている。

その努力を通じて、儒学から現代中国に役立つ教えを取り出し、現代中国社会に提唱する動きが見られる。そこに取り出された教えは、ほとんどが先秦儒学の教えであり、それに対して、漢の「陰陽五行説」や「災異説」、魏・晋以来の「経学」、唐の「道統説」、宋・元の「理学」、明の「良知心学」とも呼ばれる「陽明学」、清の「考証学」などの学説の教えは、研究の場でしか見られない。

取り出された先秦儒学の教えは、現代中国の様々な領域で、道徳思想や倫理思想の形で教えられている。本章は、日常生活、教育活動、経済活動、政治活動の四つの領域に限定し、これらの領域に見られる先秦儒学の影響を分析し、現代中国と先秦儒学の関係について考察する。

#### 4.1. 日常生活に見られる先秦儒学の影響

現代の中国では、儒学精神を見失っている人が多いものの、よく観察すれば、日常生活の隅々まで、先秦儒学の姿とその影響が見られる。

まず、先秦儒学の「孝」の思想は、現代中国において非常に重視されている。

孔子によると、孝とは、敬を以て、常に親のことを心にかけ、なお親に心配な思いをさせないようにし、その上に絶対的な従順を貫徹することであり、この孝の思想は後世の儒学者たちに継承され、歴代の中国人の思考方式、行動様式に甚だ大きな影響を与えてきた。時代の変遷とともに、孝の解釈の仕方には部分的に違ってくる場所が見られるが、現代に至っても、「敬を以て、常に親のことを心にかけ、なお親に心配な思いをさせないようにする」という点においては変わりがない。

「寸草の心は三春の暉を報い得ん」というように、自分のことを何よりも大切にしてくれて、長年変わりなく全力で養ってくれた親に対して、子どもが何をしてあげても、その恩情に十分に報いることはできない。だからこそ、どのように些細なことであっても、常に親のことを心にかけるべきだというのが、孝の思想を重視する現代中国人の一般的な考え方である。

例えば、子どもが成人したら、親のもとから離れ、自分の家庭を築くようになるが、親の家と子どもの家の間には、深いつながりがある。

子どもが結婚するとき、結婚する相手については、親の同意をもらわなければならない。もし親が強く反対するにもかかわらずその相手と結婚したら、それは親に逆らうことになるので、不孝として扱われる。親を説得できず、同意をもらえないため、やむをえず別れるケース

も多く見られる。これは法律で定められたことではないが、現代中国人の場合、こういう考え方が普通である。

また、子どもが結婚し、自分の家庭を築いたとしても、できることなら、親のそばに住んであげたいというのが現代中国人の一般的な考え方である。もし親と同じ町に住んでいるとしたら、週二、三回、自分の夫や妻、そして自分の子どもを連れて親の家に行くのがごく当たり前のことである。遠く離れた町に住んでいるとしても、休みがあるときはやはり、親のところに行く。「春運」と呼ばれる旧正月の帰省ラッシュ、その帰省先は他でもなく、親のもとであり、「せめて春節だけでも親と一緒に過ごしたい」という気持ちが両親のもとから遠く離れている子どもたちの心にある。長い間親に会いにいかないのは親のことを心にかけていない証拠であり、不孝として扱われる。

さらに、自分の子どもを生むこともまた、親への孝行の一つである。『孟子』には、次の教えが見られる。

「不孝には三つあるも、後無きを大と為す。」(『孟子』離婁上)<sup>6)</sup>

子どもを生まないことは、家族の血脈を絶やすことに等しく、最も不孝なことである。戦国時代の孟子が説いたこの教えは、現代中国においても大きな影響力をもっている。結婚したとしても、仕事が忙しくて時間がないとか、お金の蓄えが足りないなどのため、子どもが欲しがらない人が多くいるが、親に強く押され、親を喜ばせるために子どもを生むのもよくあることである。親には、自分の親から継いだ血脈を絶やしたくないという理由のほか、はやく孫を抱きたいとか、自分の子どもに人の親になってもらいたいなどの考えもあるかもしれない。考え方はどうあれ、子どもに孫を生んでもらいたいという気持ちは一緒である。このような親の気持ちを無視し、子どもを生まないのは不孝として扱われる。

以上に論じたように、親の家と子どもの家の間には、深いつながりがある。そして上にあげた例のほかにも、現代中国人の日常生活のさまざまなところにおいて、「敬を以て、常に親のことを心にかけ、なお親に心配な思いをさせないようにする」という孝の思想は、その影響力を発揮している。

また、孝のみでなく、仁、義、礼<sup>7)</sup>などの儒学的道徳思想の影響も、現代中国人の日常生活の隅々にまで見られる。

仁、義、礼の、いずれも孝と同じく、先秦儒学者たちが提唱していた徳目の一つである。孔子、孟子、荀子それぞれの、仁、義、礼への解釈には異なるところが見られるが、その中心思想は共通しており、二千年以上の時を経て中国人の道徳形成に甚だ大きな影響を与えてきた。仁、義、礼の意味は、時代の変遷とともに変容しつつあり、今日の中国において、徳目としての仁は「人と人の友愛の精神、助け合いの精神、または同情などの精神」を表し、徳目としての義は「正義や公益に合うこと、または公正である道理や言動」を表し、徳目としての礼は「尊敬を表す態度や動作」を表すと解釈されている。儒学的倫理思想の徳目であった仁、義、礼は、現代中国では中国人の伝統的・一般的な道徳思想の形で生きている。

今日の中国において行われている道徳教育では、直接に「仁や義、または礼を身にそなえよ」とは教えていないが、「友愛の精神、助け合いの精神、同情の精神は重要であり身にそなえるべきである」「何をしても必ず公正でなければならず、また正義や公益も重要である」「どのような相手に対しても尊敬を持すべきである」のように教えている。「仁」「義」「礼」などの言葉それ自体は使われていないが、それらの言葉に含まれている意味が現代中国の道徳教育で強調されていることは確かであり間違いのないことである。道徳教育を通じて仁、義、礼の精神を身にそなえた現代中国人の思考方式、行動様式には、先秦儒学の大きな影響が見られる。

子どもの頃から身の回りの人と友愛の情を結び、互いに友愛の精神をもって付き合う。困っている人を見たら、助け合いの精神をもって援助し、いつか自分が困るようになったら他人もまた必ず助けにきてくれる。弱い立場にある人に対しては同情を寄せ、その不幸な状況から救ってやりたいと思うようになる。何をなそうとしても、公正の精神をもって行動する。自分に可能であれば、常に正義を守るために勇敢に動き出し、公益活動には積極的に参加する。目上の人にはもちろん、地位の同じ人や、目下の人にも尊敬を持して行動する。これらはすべて先祖から継承されてきた中華民族の道徳であり、中国人であれば身にそなえるべきであり、そのように行動するべきであると期待される。

孔子、孟子、荀子が説いた仁、義、礼と比べれば、現代中国に生きている仁、義、礼の精神は、変容したとはいえ、それもまた今の時代に適応するためである。先秦儒学が説かれていた時代は春秋戦国時代であり、当時の

中国は封建社会であった。その時代に生まれた先秦儒学の道徳理念を、現代中国においてそのままの形で用いることは明らかに不適切であり、現代中国社会に適する新しい形で活かさなければならない。これについては、本論文の第五章にて詳しく述べることにする。

また、孝、仁、義、礼のほかに智や信または、忠恕—これは孔子が説いた人間の徳目であり、一言で言えば「仁」と同義であるのだが—などの徳目も、孝、仁、義、礼と同じように、中華民族の伝統的道徳としての形で現代中国人の日常生活においてその影響を発揮している。今日の中国においては、智は一般的に人の智慧と能力を指し、また、「知育」の意味で用いられることもある。徳目としての信は「誠実さ」を意味する。忠は「忠実」または「忠誠」を意味する。恕は「思いやり」を意味する。

以上をまとめると、現代中国人の日常生活には、先秦儒学の大きな影響が見られるといってもよいのである。しかし、現在の中国社会においては、不孝、不仁、不義、無礼、無信、不忠の現象が多く見られる。以下は、その原因について論じてみる。

1919年に「新文化運動」または「五四文化運動」と呼ばれる思想文化の革新運動が発生し、陳独秀、魯迅を代表とする中国の伝統的な文化や道徳思想に反対する人たちは、「打孔家店」（孔家店打倒）というスローガンを掲げ、家父長制的な宗法制度や男尊女卑の思想を持つ儒学を排斥しようとした。さらに現代に至って、「文化大革命」の時期においても、専制的な封建思想を代表するものとされる儒学は、平等主義を唱える共産主義と相容れないため、階級闘争の名目で批判され弾圧された。その結果、儒学道徳は極端に軽視されるようになった。

文化大革命が終わり、平等主義のみでは、経済成長を求めることができないことが意識され、改革開放政策が実施されるようになった。経済成長を主とする国家政策の下で、「経済的に成功したい」という傾向が反動的にさらに成長し、拜金主義に傾倒する人が多く現れ、主知主義に基づく競争が展開されてきた。経済的な成功が高く評価されるようになったため、金銭取得に結びつく知識や技能が教育上において重視されるようになり、よりよい進学先や就職先を目指そうとするための知育偏重の風潮が現れ、徳育や体育は軽視されるようになってきた。軽視された徳育は、その機能を十分に発揮できなくなり、経済的に成功することが至上とされるようになった現代中国では、経済競争に勝利するために、自分の利

益を求めるために行動する社会的雰囲気濃厚になってきた。金銭的利益が得られるのであれば、手段を選ばない人が増え、その徳のない言動、または少々の悪徳は社会的に許容される範囲に入ってきており、不孝、不仁、不義、不忠、無礼、無信の現象が多く現れるようになった。

その中で、特に汚職事件が多く発生し、汚職を内在する不公正な経済活動が多々見られる。金銭の重要性が支配的である今日においては、経済的欲求が道徳的欲求を押さえ込んでおり、人々の心の中で道徳は衰退しているように見える。利益の追求を第一の目的として、人々は不公正な振る舞いをするようになる。現在の中国の政治体制は、権力を持つ人がすべてを決める体制になっており、その人が汚職する人であれば、金を出してその人の権力を借りて自分の目的を成し遂げることができる。そのため、汚職や、汚職を内在する不公正な経済活動が横行している。社会も、汚職が蔓延しやすい社会構造になってきた。

現代中国の一元制の政治体制では、汚職の監視や、それに対する制裁がうまく機能しない。汚職する人も、汚職を監視する人も、同じ共産党に属する人であるため、身内を押さえないと汚職は抑えられないことになっている。さらに、マスメディアの政府への批判は許されないため、一般民衆は我慢するしかなく、次第にそのような不公正な体制に順応してしまう。その結果、ある程度の汚職は社会的に許容されるようになってきた。

しかし社会には、自浄能力が必要である。自浄能力を持つ社会のみが、悪習を根絶することができる。現在の中国では、汚職を批判したり監視したりする社会構造が脆弱であるため、共産党は一元制のもとで強力な自浄システムを作り、社会を浄化することに努めなければならない。

現代中国は法治主義の国家であり、悪行をし、法律を破った人を罰する法律システムが存在する。しかし、法律のみに頼っては解決できないことが多く存在する。経済発展が進めば進むほど経済的格差が広がり、格差が広がれば広がるほど貧しい人が増える。貧困にある人は、とりあえず生きていくだけでも精一杯なので、時には食べるために悪行を犯し、法律を破らなければならない。これらの人を罰しても、生きていくために次もまた同じようなことをしてしまう。したがって、彼らの生活を根本から改善する必要がある。悪いことに手を染めざるを得ない人がなくなるように努力していくのは政府の役割

であり、近年、このような動きが多く見られるようになってきた。

また、罰するのは法治主義の考え方であるが、孔子が「これを道びくに政を以てし、これを斉うるに刑を以てすれば、民免れて恥ずること無し。これを道びくに徳を以てし、これを斉うるに礼を以てすれば、恥ありて且つ格し。」（『論語』為政第二 三）<sup>81</sup>と説いたように、法律や刑罰のみで人々の行動を規制していくなら、人々は刑罰を免れさえすればよい、見つからなければよいと考え、恥を知らない人間になってしまう。徳治主義に基づいた徳と礼による規制でなければ、悪習を根絶することができない。

そのため、現代中国には、法治主義に基づく賞罰のみではなく、それと同時に徳治主義に基づく自覚ある道徳人の育成も求められている。道徳人の育成は、法律を守らせるための整備でもあるため、現行の法治主義とは互いに補完し合うものである。

ここで考えられるのが、道徳形成に対する儒学思想の有効性である。その場合、新しい儒学思想を作るのではなく、むしろ最も純粋な倫理・政治思想の形で説かれていた先秦儒学を現代に活かすことこそが重要だと思われる。先秦儒学が最初に持っていたのは政治的な役割であるが、その内容は仁義礼智などの諸徳に関する道徳的教えであり、人々の心に道徳の必要性を説いている。政治的役割で始まった先秦儒学を今日の経済大国の観点から見直し、道徳的、経済的役割をもつものにする。そして教育の立場から、社会道徳思想の形で教え、個人道徳として根づかせ、積極的作用を発揮させる。そうすれば、一人ひとりの現代中国人の心の中に儒学精神を取り戻すことができ、人々は正直に振る舞い、道徳的活動をするようになるものと期待される。

法律で犯罪を裁き、同時に徳育で美徳を育てる。この両刃で、現代中国において見られる不孝、不仁、不義、不忠、無礼、無信の現象を正していく。近年の中国では、徳育重視の傾向が見られ、政府はさまざまな手段を通じて、一度失われた先秦儒学の精神を取り戻そうとしている。そして日常生活で最もよく見られるのは、公共広告の中の先秦儒学の姿である。

現代中国人に、現代社会で生きる人間として備えるべき道徳を普及するために、中国政府は、テレビやインターネット、ラジオ、新聞などのメディアに、多くの公共広告を投入している。その多くの公共広告の中には、先秦儒学が提唱する仁、義、礼、智、信、孝、勇、儉、

和などの徳を呼びかけるものが数多く存在し、また、孔子や孟子、荀子の教えをそのまま使う広告も多く見られる。例えば、次のような事例（下に掲げる図1~6<sup>9)</sup>を参照）を挙げることができる。



図1 中国夢一仁愛



図2 中華美德一孝



図3 中国精神一節儉

上に挙げた三つの例は、それぞれ「仁」「孝」「儉」を呼びかける広告である。そして、その仁、孝、儉は先秦儒学の教えとしてではなく、中国夢（中国人共同の夢）、中華民族の美德、中国精神として提唱されている。先秦儒学が提唱した諸徳が、今日の中国では「中国人の備えるべき徳」として位置づけられている。また、「君子」という言葉も、立派な人格の持ち主や道徳的品行の良い人を形容する言葉として今日の中国で使われている。



図4 不知礼無以立

「礼を知らざれば、以て立つこと無きなり。」（『論語』堯曰第二十 三）<sup>10)</sup>

この一文のように、礼を知らなければ社会で立つこと

ができないと孔子は説いた。孔子の時代の礼の内容と現代中国の礼の内容とは、部分的に違いがあるが、礼が社会に生きる人間の行動基準であることには変わりがない。現代中国には、礼に合わない行動をする人々が多く見られる。このような人がある限り、現代中国の様々な社会問題が絶えることはない。この公共広告は、孔子の教えをそのまま使い、現代中国人の心に礼の精神を喚起しようとするものである。



図5 老吾老以及人之老



図6 幼吾幼以及人之幼

「吾が老を老びてよそ人の老に及ぼし、吾が幼を幼しんでよそ人の幼に及ぼさば、（天下は掌に運らすべし。）」（『孟子』梁惠王上）<sup>11)</sup>

まずは自分の家の年寄りの父母を老人として敬い仕え、それから他人の家の父母にも及ぼしていく。まずは自分の家の幼い子をいたわり慈しみ、それから他人の家の幼い子にも及ぼしていく。現代中国には、親不孝な子女や、子どもへの愛情の不足する親が多く見られる。自分の親にすら孝を尽くさない子女は、他人の親を尊重する道理がない。自分の子どもをすらいたわらない親は、他人の子どもを慈しむ道理がない。このような人々こそが、儒学精神を見失っている人々である。彼らにいきなり「他人の親を尊重しなさい」や「他人の子どもを慈しみなさい」のような要求をしても、応えてくれることはない。まずは自分の親を尊重することや自分の子どもをいたわることから始めなければならない。この公共広告は、孟子の教えをそのまま使い、儒学精神を失っている一部の現代中国人の心に仁と慈愛の精神を取り戻そうとするものである。

公共広告は、受け手の願いと求めを代表し、受け手のアイデンティティを喚起することができる。それ故、公共広告は国民の道徳教育の一つの有効な手段として各国に採用されている。現代中国人の心の中に先秦儒学の精神を取り戻すために、中国政府はメディアに多くの公共広告を投入しており、時間の経過とともに、一定の効果



が取められている。しかし、社会問題が多く起こる旧態は依然として変わりが無い。その原因として、公共広告の数がまだ足りないこと、公共広告の質がよくないこと、公共広告が投入されてから経った時間がまだ短いことなどが考えられるが、最も重要な原因として、一部の現代中国人には自覚と責任感が欠けていることを認めなければならない。現代中国人の自覚と責任感を養成することは、今後の中国に与えられる課題の一つである。

#### 4.2. 教育活動に見られる先秦儒学の影響

先秦儒学の姿は、現代中国で行われている様々な教育活動に見られる。

例えば、今日の中国の中学校一年の“语文”（国語）の授業で最もよく使われる教科書《义务教育课程标准实验教科书语文七年级上册》（人民教育出版社）には、『《論語》十二章』の一課がある。『論語』から十二の教えを取り出して一つの課にまとめたものである。

また、中学校三年の“语文”の授業で最もよく使われる教科書《义务教育课程标准实验教科书语文九年级下册》（人民教育出版社）には、『《孟子》両章』の一課がある。『孟子』から二つの段落を取り出して一つの課にしたものである。

ほかの国語教科書にも、先秦儒学の名著の文章を本文として使うケースが見られる。

先秦儒学の名著の文章を文語文の形で学生に教えることにより、学生に先秦儒学の教えとその道徳精神を理解させ、身につけさせることができる。

中学校の“思想品德”の授業（道徳教育の授業）においては、先秦儒学が説いた孝、信、勇、儉などの諸徳が現代中国人の身に備えるべき徳として提唱されている。

以上の例を通じて、義務教育の段階では、すでに先秦儒学に関する教育が行われていることがわかる。

高等教育の場においても、先秦儒学に関する教育や研究が盛んになっている。中国の四川大学には「国際儒学研究院」が、中国政法大学、上海師範大学には「国際儒学院」が、山東大学には「儒学高等研究院」が、中国人民大学には「孔子研究院」が、そして北京大学には「儒学研究院」が設置されている。また、儒学が必修科目や選択科目として設置されている大学が多くある。

そのほかにも、「中華孔子学会」や「中華儒学連合会」などの民間学会組織が活躍している。このような民間組織においても、先秦儒学に関する研究が積極的になされている。

以上に挙げた例のように、今日の中国においては、学

校で先秦儒学に関する教育が行われている。このような教育活動も、現代中国人の心の中に儒学精神を取り戻すための努力の一つである。教育を受ける学生たちには良い影響が期待されており、そして実際のところ、道徳教育を受けなかった世代の人と比べれば、若い世代の道徳性は高まっているように見える。しかし、それが果たして道徳教育の影響なのかどうかを明らかな証拠をもって断定できる段階にはなく、今後の検証課題となるべきテーマである。

#### 4.3. 経済活動に見られる先秦儒学の影響

先秦儒学は倫理・政治思想の形で説かれていたが、現代中国の経済活動には先秦儒学の思想の影響が見られる。

現代中国には、「儒商」と自称する、または称される商人が多くいる。彼らは孔子や孟子が提唱した儒家思想の道徳観と価値観を行動の基準とし、個人の修養を重視し、商業道徳にかなう道徳的経済活動をおこなう。さらに、彼らは儲けた利益の一部を社会に還元し、経世済民の理念と責任感を持つ商人である。邵逸夫、霍英東、杨文龙などが、現代中国の儒商の代表者である。彼らのような儒商が、現代中国の様々な事業に対して果たした貢献度は非常に大きい。

人間には生まれながらに欲があり、経済的利益を追求するのは人間の本性である。経済活動は利益を追求する活動であり、その成敗は人間の欲をさらに刺激し、膨張させる。欲に節度を持たせなければ、人間は次第に貪欲になり、ついに利益を追求するために道徳を無視して不道徳な振る舞いをするようになる。儒商は儒家思想の道徳観と価値観を行動の基準とし、仁、義、礼、智、信を提唱し、かつ実行する。彼らは儒学の教えをもって自分の欲を抑制することができる。

『論語』と『孟子』には、儒商の行動を導くような教えが多く見られる。以下に例を挙げる。

「子の曰わく、富にして求むべくんば、執鞭の士と雖ども、吾れ亦たこれを為さん。如し求むべからずんば、吾が好む所に従わん。」（『論語』述而第七 十二）<sup>12)</sup>

「窮しめば則ち独りその身を善くし、達するれば、則ち兼ねて天下を善くす。」（『孟子』尽心上）<sup>13)</sup>

求めてもよい富であれば、たとえどんな賤しい役目でも私はそれを務めるが、求めてはいけない不義の富であ

れば求めることはしない。貧窮の時は一人で自分の身を修養し、裕福な時は天下の人々の生活を豊かにする。これらの教えが儒商の最も基本的な行動基準である。儒商はこれらの教えをもって自らの行動を律し、さらに積み上げた富の一部を様々な形で社会に還元する。彼らは利よりも義を重視する商人であり、不公正な経済活動が多く見られる現代中国にとって極めて大切な存在である。

今日の中国において、儒商が大きく重視されるようになり、各地で多くの儒商連合会が結成され、儒商学院が設立され、さらに「孔子儒商奨」という、儒商を奨励する賞が設けられた。これからの中国では、儒商の数がますます増えるようになって考えられる。

#### 4.4. 政治活動に見られる先秦儒学の影響

先秦儒学が説かれていた春秋戦国時代の中国は、封建社会の政治体制であり、天子の下で諸侯が各自の領地の全権利を握っていた。その時代に生まれた先秦儒学の政治理念を、現代中国においてそのまま用いることは明らかに不適切である。しかし、現代中国で用いられている政治理念には、先秦儒学の政治理念と共通するところが見られる。

孔子、孟子、荀子の三人は、いずれも為政者の位置に立つ者は徳を身に備える人でなければならず、民衆はその徳を慕い、それを模範にして導かれると説き、徳治主義を提唱した。現代中国にも、徳治主義の政治理念が見られる。

現代中国は君主制ではないが、国の指導者や幹部、または共産党員には自身の道徳修養が要求されている。国家主席の習近平は2012年に、「(党の指導幹部は)理想と信念を堅持し、事実に基づいて真実を求めることを堅持し、科学の発展を推進し、群衆と密接に結びつき、道徳修養を強化し、党の規律を厳守し、これらの方面で多くの党員の模範になるべきである」<sup>14)</sup>という発言をした。また、習近平は2014年に、「中国伝統文化は一貫して自律という言葉正しい人間になることの、正しいことをすることの、役人をつとめることの基礎であり、根本であるとす。『論語』には、「己れを修めて以て敬す」「己れを修めて以て人を安んず」「己れを修めて以て百姓を安んず」のように説かれている。古人は身を修め、家を整え、国を治め、天下を平らかにする<sup>15)</sup>ことを推賞していたが、身を修めることが第一位に置かれた。我々共産党人こそが自我の修練を強化し、自我を制約し、自我の形を作り、廉潔であり自律することにおいて他人の手本になるべきだ<sup>16)</sup>という発言をした。以上の発言から、

現代中国の執政党である中国共産党の党員には道徳修養が要求されていることがわかる。この点において、現代中国で用いられている政治理念には、先秦儒学の政治理念と共通するところが見られると言ってもよいと思われる。実際に党員全員が自身の道徳修養を強化しているかどうかは分からないが、各級の指導幹部は、熱心に様々な道徳活動やイベントに参加し、自身が諸徳を備えている人であるというイメージを作ろうとしている。

「徳を以て国を治める」ことや、「徳を以て党を治める」ことは、現代中国において大きく強調されている。2014年10月に開かれた中国共産党第十八届中央委員会第四次全体会議の「決定」には、「中国式社会主義法治体系と社会主義法治国家を建設するには、法に依って国を治めることと徳を以て国を治めることとを結びつけなければならない」<sup>17)</sup>という一文が見られる。「徳を以て国を治める」という現代中国で用いられている政治理念と、先秦儒学者たちが提唱していた徳治主義との間に多くの共通点が見られるのは言うまでもないが、「法に依って国を治めることと徳を以て国を治めることとを結びつける」という理念もまた、荀子の「道徳と法律とは国家成立の根本である」という理念と似ている。

また、中国共産党中央政治局常務委員を務める王岐山は2015年に、徳を以て党を治めることを強調する発言をした。さらに、徳を以て党を治めることの「徳」について、王岐山は、「徳を以て党を治めるの『徳』は、党の理想信念の宗旨であり、優良な伝統的作法である。その内核は中華民族の伝統美徳と同じ血脈を受け継いでいる」<sup>18)</sup>というように解釈した。党を治めるのも国を治めるのと同じように、先秦儒学から受け継がれた中華民族の伝統的道徳を以てするべきである。先秦儒学者たちが提唱していた徳治主義は、党を治めることにおいても用いられていると言ってもよい。

現代中国においては、民本主義が提唱されている。中国共産党のテーゼ(綱領)は“为人民服务”(人民に奉仕する)であり、根本的な活動方針は“群众路线”(すべては民衆のために、すべては民衆に依拠し、民衆の中から来て、民衆の中に行く)である。現代中国はまだ社会主義の初期段階にあり、日に日に増えている民衆の物質的、及び精神的需要と、後れている社会生産力との間の矛盾が認識されている。民生の改善、経済の成長は現代中国が果たさなければならない最も重要な任務である。この民本主義は、孟子の政治理念と共通している。

「民生の安定を保障した上で、民衆に諸徳の教育を受

けさせるべきである」と、先秦儒学の学者たちは主張した。現代中国においても、道德教育の重要性が認識され、道德教育が積極的に行われている。この観点も、先秦儒学の政治理念と共通している。

以上をまとめると、現代中国においては、共産党の指導幹部や党員は自身の道德修養を強化して他の党員や群衆の模範になり、徳を以て国と党を治め、国家は民生の改善と経済の成長を果たし、民衆に諸徳の教育を受けさせるべきであるというような政治理念が提唱されている。これらの政治理念は、先秦儒学の政治に関する諸主張と似ており、特に孟子の王道論との間に多くの共通点が見られる。国家や党の指導幹部が重要な発言をするとき、多くの場合、直接に儒学の古代典籍の名句を引用して新しい意義を与え、中華民族の伝統文化を発揚しようとしている。現代中国の政治活動には、先秦儒学の影響があると認めてもよいと思われる。

## 5. 現代中国に求められる儒学の形

現代中国において先秦儒学に積極的作用を発揮させるのであれば、そのままの形ではなく、古い先秦儒学思想を整理し直し、思索を加え、現代中国社会に適する新しい形にして活かさなければならないということは上に述べた。さて、現代中国に求められる儒学の「新しい形」とは果たしてどのようなものなのか。現代中国で活かすために、古い先秦儒学のどの部分を見直さなければならないのか。本章はこれらの問題について、筆者の見解を述べてみる。

先秦儒学に期待される最も重要な働きは、道德精神を見失っているように見える現代中国人の心の中に道德心を取り戻すことである。そのため、現代中国に求められる儒学は、まず道德的役割をもつものでなければならない。そしてその道德は、現代中国社会に適し、現代中国社会において提唱すべきものでなければならない。したがって、先秦儒学の中の、すでに現代中国社会に適さない道德に関する教えを、取り除く必要がある。

例えば、先秦儒学の孝と悌の思想については、見直す必要がある。孔子は、親への絶対的な服従を孝とし、弟が兄に、年少者が年長者に仕えることを悌とした。孔子は孝と悌を基本的な徳目として重んじ強調した。孔子の時代には、家父長制という家父・家長の支配権を絶対とする家族形態が一般的であり、このような孝や悌は家族形態を維持するものとして、当時の人々に受け入れられたが、現在の中国ではもはや家父長制がほとんど見られ

ず、このような親への絶対的服従や年少者の年長者への心がけなどは現代中国社会に向いていないといっても過言ではない。

また、孔子、孟子、荀子の三人は、いずれも「礼」を重視し、社会秩序を保つための生活規範として提唱したが、三人によると、礼の規範は古の聖人が定めたものであり、その定められた規範を覆すことは礼を捨てることに相当する。春秋戦国時代の中国は封建社会の国家であり、当時において提唱された数々の礼は、当時の社会に適するものであったが、現在の社会主義の中国においては、その礼の内容の大部分はそのまま用いることができない。礼の思想とその精神を現在の中国で活かすためには、現代中国のさまざまな地域や民族の文化や習俗などに詳細な考察を加えなければならない。

徳治主義に基づく自覚ある道德人の育成が求められている現代中国は、何よりもまず法治主義の国家であり、法治主義の国家に求められる儒学は、現行の法治主義とは互いに補完し合うものでなければならない。したがって、法律による規制への孔子や孟子の批判は、現代中国において提唱すべきものではない。

孔子や孟子に対して、荀子は法律を道德と同等の位置に置き、国家にとっての法律の重要性を説いた。『荀子』には、次のような教えが見られる。

「土無ければ則ち人は安居せず、人無ければ則ち土は守れず、道法なければ則ち人は至らず、君子なければ則ち道は挙げれず。故に土と人、道と法とは、国家の本作なり。而して君子なる者は道と法との総要なり。少頃も曠しくすべからず。」（『荀子』致士）<sup>19)</sup>

「今亦た天下の顯諸侯を以て義を志意に誠にし義を法則度量に加えてこれを政事に箸わし案にこれを貴賤殺生に申き重ね襲然として終始を一の猶くならしむ。是くの如くなれば、則ち夫の名声の天地の間に剖き発するや、豈に日月雷霆の如くならざらんや。」（『荀子』王霸）<sup>20)</sup>

土地と人民、道德と法律とは国家成立の根本であり、道德と法律との中心には君子が立つべきである。たとえ道德と礼を用いる王道であっても、法律による規制の補佐が必要であると荀子は説いた。法律による規制を批判する孔子や孟子の立場よりも、法律を重視する荀子の立場のほうが法治主義の国家である現代中国に適する。それ故、法律による規制を批判する孔子や孟子の思想では

なく、法律を重視する荀子の思想を残すべきである。

封建社会で生まれた先秦儒学の思想を社会主義国家である現代中国で活かすために、先秦儒学がもつ封建的な部分を徹底的に取り除き、または見直す必要がある。

例えば、よく封建的な徳目の一つとされ、批判を浴びる「忠」の思想については、次のような見直しが必要である。

孔子によると、忠とは、「人に対して自分のまごころを尽くす」ことである。現在では、忠はよく「臣下が君主に対して本分を尽くすこと」という意味で使われているが、孔子の場合は、忠は臣下の君主に対する忠誠だと限定されておらず、もっと一般的な徳目として説かれている。

「子張、政を問う。子の曰わく、これに居りては倦むこと無く、これを行なうには忠を以てす。」（『論語』顔淵第十二 一四）<sup>21)</sup>

「子の曰わく、忠信を主とし、己れに如かざる者を友とすること無かれ。過てば則ち改むるに憚ること勿かれ。」（『論語』子罕第九 二五）<sup>22)</sup>

「子貢、友を問う。子の曰わく、忠告して善を以てこれを道びく。不可なれば則ち止む。自ら辱めらるること無かれ。」（『論語』顔淵第十二 二三）<sup>23)</sup>

以上の教えを見れば、孔子の説いた忠が、臣下の君主に対する忠誠という特定の人倫における徳目ではないことが分かるであろう。為政者の立場においても、朋友の立場においても、人に対して事を行うには自分のまごころを尽くすべきであると孔子は主張した。現代中国で忠の思想を活かすのであれば、臣下の君主に対する忠誠としての側面を取り去る必要はあるが、友だちに対するまごころを尽くすこととしての側面は残すべきである。

さらにまた、先秦儒学を一つの思想として現代中国で教えるのであれば、孔子、孟子、荀子の思想のそれぞれ対立するところに思索を加えなければならない。

例えば、孟子の性善論と荀子の性悪論との関係については、さらなる考察を展開する必要がある。孟子と荀子、どちらも孔子の思想を継承し発展させたが、孔子が詳しく論じたことのない人間の「性」の善悪について、彼らはそれぞれ異なる見解を述べた。一見対立しているように見える性善論と性悪論との本来の意味を把握し、両者

の関係を究明することは、先秦儒学の再整理において極めて重要な一環であると思われる。

孟子は、すべての人間に共通する本性として惻隱の心、羞惡の心、辭讓の心、是非の心があると述べ、人間は生まれながらにして善であると主張した。しかし、「性は善」といっても、それは、人間の深い部分には「善性」が誰にも備わっているが、何もしないでも、それが誰でもいついかなる時も、十全に発揮できるとは言っていない。どうすればいいのかということについて、孟子は、人間の生まれながらに善である性を、正しい教育で育て、外的環境からの良い影響を受けさせ、また自ら修養に努めるならば、人の道徳が成就すると主張した。逆に、善である性に、外的環境からの悪い影響を受けさせ、あるいは教や修養が足りなければ、その善である性は次第に失われることになり、道徳が成就せず、人は悪いことをするようになると孟子は説いた。

荀子は、孟子と違って、人間の本性は生まれながらにして悪であると説き、人間に見られる善というのは思慮や学習努力などの人為的なことの結果であると主張した。荀子によれば、人間には生まれつき利益を好む傾向性、嫉妬や憎悪をする傾向性、さらにさまざまな欲望がある。その本性のままに従い、その感情のままにしておくと、必ず奪い合いの結果が生じる。だから必ず師匠・法度の教化や礼義の指導があってこそ、はじめて人間は譲り合うようになり、礼の文飾条理を守るようになって治平の世に帰着する、と荀子は主張し、悪である本性を克服するための学問の重要性、そしてその学問によって礼を身につけることの重要性を説いた。

性善論と性悪論は、一見対立しているように見えるが、視点を変えると、孟子も、荀子も、人間のもつ性質の片方を強調しているにすぎないと見ることができる。教育・学問を重視し、後天的に身につけた学によって礼を知り、聖人への道を目指すべきであるとの主張は、両者に共通である。

ただし、孟子と荀子とでは人間の本性、人間の性質を見るときに力点あるいは焦点の当て方に違いがある。

孟子は人間の心そのもの、個々の人間の持っている深部の善性に焦点を当て、荀子は、人はどのような動機で行動するかに力点を置いていた。したがって孟子の場合、心の最深部にある善性を正しく導くならば人の徳性は向上し、社会の安定も自然に実現するという主張になる。それに対して荀子の場合、社会を安定させなければ人間はその性の悪の部分の常を常に発揮するので、まず社

会を制度や法的な面で安定させていかなければならないという主張になる。

以上のように、人間観の対立としてではなく、人間のどの部分に焦点を当てているのかと考えるほうが性善論と性悪論との関係を正しく把握するのに有効である。

また、現代の社会生活において見られる人間の本性も、この性善論と性悪論との関係を反映していると考えることができる。人間なら誰でも心の最深部には善性をもっているにもかかわらず、日常の政治的・経済的・社会的な行動においては利己的に振る舞い、組織内での仕事でも利己的に振る舞うことが多い。また社会が混乱してきたときには、多くの人が人間の悪性の部分を発揮するというのを見ても、人間の利己的本性を理解できる。そしてこれは、いついかなるときも「善い人」である者と、いついかなるときも「悪い人」である者が固定的にいるのではなく、両方ともに、同じ「人間という存在」の姿を示すものである。そして、人間の心中の善性を引き出して育てるために、あるいは人間の悪性の部分を規制するために、道德教育が必要になってくる。孟子の立場であれ、荀子の立場であれ、道德教育の必要性は当然のこととして認められなければならない。

以上をまとめると、現代中国に求められる儒学の形が見えてくる。まず、道德心を取り戻そうとする現代中国に求められる儒学は、道德的役割をもつものでなければならない。そしてその道德は、現代中国社会に適し、現代中国社会において提唱すべきものでなければならない。また、法治主義の国家である現代中国に求められる儒学は、現行の法治主義と互いに補完し合うものでなければならない。さらに、社会主義国家である現代中国で活かすために、先秦儒学がもつ封建的な部分を徹底的に取り除き、または見直す必要がある。最後に、先秦儒学を一つの思想として現代中国で教えるのであれば、孔子、孟子、荀子の思想のそれぞれ対立するところに思索を加えなければならない。まさしく第1章に紹介した習近平主席の言葉のとおり、「唯物史観の立場を堅持し、昔のものを現在に役立たせ、粕を除いて精髓を取り出し、偽物を取り去って本物を残し、その勢いに応じて有利に導き、より深い段階に向かって研究し、儒学を新たな時代条件の下で積極的な作用を發揮させるべき」である。

## 6. おわりに

以上のように、本論文では現代中国に見られる先秦儒

学の影響について考察し、現代中国に求められる儒学の形について考えてみた。

先秦儒学の教えは、現代中国の様々な領域で、道德思想や倫理思想の形で生きている。特に日常生活、教育活動、経済活動、政治活動の四つの領域には、先秦儒学の姿とその影響が強く見られる。

しかし、現代中国には儒学精神を見失っているように見える多くの人がいる。その結果として、現代中国社会では、様々な社会問題が起きている。これらの社会問題を解決するためには、道德形成に対する先秦儒学思想の有効性が考えられる。古い先秦儒学に新しい思索を加え、現代中国に適する斬新な形にして活かせば、一人ひとりの現代中国人の心の中に儒学精神を取り戻すことができ、人々は正直に振る舞うようになるものと期待される。

めざましい経済発展を遂げつつある現代中国には、今後、先秦儒学の役割が不可欠になるとと思われる。

### 謝辞

本論文の英文タイトル、キーワード及びアブストラクトのネイティブチェックについては、鹿児島国際大学大学院国際文化研究科のマクマレイ・デビッド教授のご助力をいただきました。この場を借りて敬意と感謝を申し上げます。

### 注

- 1) 習近平 (2013.11.26) 「研究孔子和儒家思想要坚持历史唯物主义立场, 坚持古为今用, 去粗存精, 去伪存真, 因势利导, 深化研究, 使其在新的时代条件下发挥积极作用」。日本語訳は筆者による。
- 2) 朱子学の内容について、島田 (1967) は、次のように論じている。「朱子学の内容は、大きく分けて四つ、あるいは五つぐらいに区分することができる。第一は存在論、つまり「理気」説、第二は倫理学あるいは人間学、すなわち「性即理」の説。この倫理学の部分が、朱子学の中心をなしていることはいうまでもない。第三には、方法論、すなわち「居敬・窮理」の説。第四には、古典注釈学および著述。要するに「四書集注」や「詩集伝」などのようなもの。また注釈ではないが、歴史書「資治通鑑綱目」や「文公家礼」など。第五としては、科挙に対する意見や、社会法、勸農文その他の具体的な政策論のようなもの。」(島田 (1967) の79ページを参照。)
- 3) 通常、「現代中国」といえば、1949年以降の中国を指すが、儒学思想は文化大革命の時期では「革命に対する反動」として批判され、「批林批孔運動」などの政治運動において徹底的に弾圧され、大きな損害を受けた。その弾圧が鎮まるのは改革開放が始まってからのことであり、そして儒学思想が中国の伝統的な道德思想として再評価されるようにな

- るのは、21世紀に入ってからのことである。よって、本論文で使われる「現代中国」または「現代の中国」というような表現は、1978年以降の「改革開放後の中国」を指す。
- 4) 梁啓超《新民説・論公德》(1902.3.10)「人人独善其身者谓之私德，人人相善其群者谓之公德」。日本語訳は盧守助(2005)の162ページによる。
- 5) 唯物史観とは、マルクス主義の歴史観である。物質的・経済的生活関係を以て歴史的発展の究極の原動力と考える立場。これによれば、社会的・政治的および精神的生活過程一般は、究極において物質的・経済的生活の生産様式によって規定され、しかもこの物質的基盤そのものは、それ自身の弁証法的発展の必然性に従って展開するものとされる(「広辞苑第六版」を参照)。唯物史観の根本命題は、「生産関係は生産力の発展段階に照応する」と「生産関係が土台であって、法律、政治、宗教、芸術、哲学、等々は上部構造である」の二つとされている(「唯物史観の原理」15ページを参照)。中国共産党はマルクス・レーニン主義を行動指針の一つとしており、マルクス主義哲学の重要な構成部分である唯物史観は中国の社会運動とその発展の法則を分析する時に用いる手法として、中国共産党執政の現代中国において極めて重要視されている。
- 6) 「不孝有三，无后为大」。日本語訳は金谷治(1956)の38ページによる。
- 7) 孔子の道德思想の中心部分は仁と礼である。孟子は仁と礼に義と智を加え、仁義礼智を四徳と称し、それを君子の備えるべき徳とした。荀子は礼を強調すると同時に仁と義をも重んじた。後に漢の董仲舒は仁義礼智に信を加え、この五つの徳目を五常とした。
- 8) 「道之以政，齐之以刑，民免而无耻；道之以徳，齐之以礼，有耻且格」。日本語訳は金谷治(1982)の27ページによる。
- 9) 6枚のイラストはすべてwww.cctv.com(央视网)から引用したものである。また、各イラストの作者はそれぞれのイラストの右下に記してあるが、明らかにはみえにくいので、次のように整理してある。
- 中国夢一仁愛：天津楊柳青画社。  
中華美德一孝：劉知貴。  
中国精神一節儉：天津楊柳青画社。  
不知礼無以立：金秋鏡。  
老吾老以及人之老：天津楊柳青画社。  
幼吾幼以及人之幼：天津楊柳青画社。
- 10) 「不知礼，无以立」。日本語訳は金谷治(1982)の276ページによる。
- 11) 「老吾老以及人之老，幼吾幼以及人之幼，(天下可运于掌)」。日本語訳は金谷治(1955)の28ページによる。ただし、一部に筆者の修正あり。
- 12) 「子曰：“富而可求也，虽执鞭之士，吾亦为之。如不可求，从吾所好。”」。日本語訳は金谷治(1982)の94ページによる。
- 13) 「穷则独善其身，达则兼善天下」。日本語訳は金谷治(1956)の256ページによる。
- 14) 習近平《认真学习党章 严格遵守党章》(2012.11.16)《人民日报2012年11月20日第1版》「特别是要在坚定理想信念、坚持实事求是、推动科学发展、密切联系群众、加强道德修养、严守党的纪律等方面为广大党员作出表率」。日本語訳は筆者による。
- 15) 「身を修め，家を整え，国を治め，天下を平らかにする」は「礼記・大学」からのものであり，原文は次のようになる。「身修而后家齐，家齐而后国治，国治而后天下平。」
- 16) 習近平《习近平在同中央办公厅各单位班子成员和干部职工代表座谈时的讲话》(2014.5.8)《习近平关于严明党的纪律和规矩论述摘编》「中国传统文化历来把自律看作做人、做事、做官的基础和根本。《论语》中就说，要“修己以敬”、“修己以安人”、“修己以安百姓”。古人所推崇的修身齐家，治国平天下，修身是第一位的。我们共产党人更应该强化自我修养、自我约束、自我塑造、在廉洁自律上作出表率」。日本語訳は筆者による。
- 17) 《決定》(2014)「建设中国特色社会主义法治体系，建设社会主义法治国家，必须坚持依法治国和以德治国相结合」。日本語訳は筆者による。
- 18) 王岐山(2015)《人民日报2015年10月23日第四版》「以德治党的“徳”，就是党的理想信念宗旨、优良传统作风，其内核与中华民族传统美德一脉相承」。日本語訳は筆者による。
- 19) 「无土则人不安居，无人则土不守，无道法则人不至，无君子则道不举。故土之与人也，道之与法也者，国家之本也；君子也者，道法之总要也，不可少顷旷也」。日本語訳は金谷治(1961)の297ページによる。ただし、一部に筆者の修正あり。
- 20) 「今亦以天下之显诸侯候义乎志意，加义乎法则度量，箸之以政事，案申重之以贵贱杀生，使褒然终始犹一也。如是则夫名声之部发于天地之间，岂不如日月雷霆然矣哉」。日本語訳は金谷治(1961)の214ページによる。ただし、一部に筆者の修正あり。
- 21) 「子张问政。子曰：“居之无倦，行之以忠。”」。日本語訳は金谷治(1982)の164ページによる。
- 22) 「子曰：“主忠信，毋友不如己者，过则勿惮改。”」。日本語訳は金谷治(1982)の126ページによる。
- 23) 「子贡问友。子曰：“忠告而善道之，不可则止，毋自辱焉。”」。日本語訳は金谷治(1982)の170ページによる。

## 文献

- 陈寒明，刘伟(2013).《儒学的理论转向：现代平民儒学的建构》《理论与现代化》2013年第1期
- 陈卫平(2010).《人道与理性：先秦儒学的基本特征》《学术月刊》2010年11月号
- 丁鼎(编)(2014).《荀子》新世界出版社
- 原光雄(1960).『唯物史観の原理』青木書店
- 金谷治(1955).『孟子(上)』朝日新聞社
- 金谷治(1956).『孟子(下)』朝日新聞社
- 金谷治(1961).『荀子(上)』岩波書店
- 金谷治(1962).『荀子(下)』岩波書店
- 金谷治訳注(1982).『論語』岩波書店

- 課程教材研究所中学语文课程教材研究开发中心(2009).《义务教育课程标准实验教科书语文九年级下册》人民教育出版社
- 課程教材研究所中学语文课程教材研究开发中心(2013).《义务教育课程标准实验教科书语文七年级上册》人民教育出版社
- 木全徳雄(1988).『荀子』明德出版社
- 梁啓超(1902).〈新民説・論公德〉《新民叢報》
- 盧守助(2005).「梁啓超の『新民』の理念」『現代社会文化研究 No.33』pp. 155-172
- 沢田多喜男, 小野四平訳(1968).『世界の名著 10 諸子百家 荀子』中央公論社
- 沈曉敏(2005).「中国の道德・社会科の再編成における『公民意識』『公共意識』の形成 —『品德と社会』教科書(上海)を中心に—」『東京大学大学院教育学研究科紀要 第45巻』pp. 257-266
- 島田虔次(1967).『朱子学と陽明学』岩波書店
- 津田左右吉(1964).『津田左右吉全集 第十四巻』岩波書店
- 宇野精一・中村元・玉城康四郎(責任編集)(1967).『講座 東洋思想2 中国思想 I』東京大学出版会
- 内山俊彦(1976).『荀子——古代思想家の肖像——』評論社
- 楊杰(編)(2007).《四书五经 第一册》北方文艺出版社
- 楊杰(編)(2007).《四书五经 第二册》北方文艺出版社
- 张容南(2014).〈何谓道德成熟:来自先秦儒学的回答〉《道德与文明》2014年第3期
- 张威(2009).〈先秦儒家人性论的政治哲学意义〉《学海》2009年第4期
- 中共中央纪律检查委员会, 中共中央文献研究室(編)(2016).《习近平关于严明党的纪律和规矩论述摘编》中央文献出版社. 中国方正出版社
- 朱桂蓮, 周佳(2009).〈论公益广告的公民道德教育功能〉《合肥工业大学学报(社会科学版)》第23卷第3期